

三時業落草序

小子象林敬序

吾師

隨處樓下閑居の折

適因果

狐疑して其有無を決せん

を請ふ

あはハ師あれふと

毘婆沙論並ふ傳燈鳩摩羅多尊者

尊語を引く。鄭重ふ其惑を

遺忘に備ふ今復梓

行く。諸人と法喜をよめよせん。あはれ法師は
あふ師の曰く。これぞ臨機乃落草にあふ。汝
も少し柱に膝もさるるもなすの汝。然らざるも
若人こそ見え。撥無の邪見を轉トて
佛海の深に信入もなす。便とあはれ。さる一助
もあはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。
あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。

三時業

雲樞老人落草

雲樞著

夫佛道を修行もなす。先因果の道理
汝明め。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。

宛乎栗や柿もあはれ。植る様なもので。
因も植る種果も秋あはれ。實の様あ
はれ。栗乃こも。植る栗をハ栗をハ柿の

種を蒔ハ柿の産如く。善業成たもの
も善の報を得。悪業成た者ハ悪の報
を得。むむこの業を成たれば、その
影の形も随ふの如く。是れ造る所の業
を因といひ、其受る所乃報を果といふ。
業報といふも因果といふも、其道理同一
なり。あやふれぬも業因といひ、果報といふ。

又善悪の業乃報を受るに三通れ時乃
次第がある。此れを三時業といふ。一、
順現法受業。二、順次生受業。三、
順後次受業あり。たとい善にも悪にも
もせよ。此生に業を造るれば、生じむく
るに受るを順現法受業といひ、又その生
じ業を造るつて次の生に報を受るは順

次生受業といふ又あり生業を造る
第三生めり或ハ四生めり乃至百千万生の
間少くもあはれ其報を受るはとて
順後次受業といふたも「バ米や菽を今
年こもば蒔てある」の内よ其實を
さる。あまきり順現法受業よ又麥や蚕
豆の類は種をうちて来年に

至く其實を収る。あれが順次生受業よ。
又桃や栗もや三年目柿ハ植てのり
八年目にやうく實あつる。又天竺ふある
多羅樹といふ木植てから百年経て初
て實を結ぶとある。あれらハ順後次受業
とある者あり。そはゆゑ世間に常くある
がけて善根功德のこゝに勤る身乃上にや

人^{ひと}も^も其^{その}勤^{つとめ}る^る善^{ぜん}業^{ごう}を^をな^なす^すて^ても^も何^{なに}事^{ごと}も^も不^ふ
 如^に意^いす^すて^て常^{じょう}に^に愁^{しゅう}を^をい^いく^く先^{まへ}の^の世^よに^に造^{つく}
 置^おく^く悪^{あく}業^{ごう}を^をい^いく^くが^がま^まぎ^ぎは^はき^きぬ^ぬま^まよ^よう^うと^と
 此^{この}世^よに^にあ^あら^らじ^じの^の善^{ぜん}業^{ごう}の^の報^{ちかひ}が^があ^あら^らじ^じれ^れぬ^ぬ
 先^{まへ}生^う乃^{すなは}ち^ち悪^{あく}報^{ちかひ}を^を盡^{つく}す^す夫^{つま}の^のら^ら今^{いま}の^の善^{ぜん}報^{ちかひ}が^が
 我^{われ}ら^らに^にあ^あら^らじ^じに^に來^きる^る又^{また}此^{この}世^よで^で悪^{あく}業^{ごう}を^を
 造^{つく}る^る人^{ひと}の^の當^{あた}り^りの^の事^{こと}に^に大^{だい}幸^{さい}が^が好^{こう}ま^まな^なあ^あ
 る^る

了^{りょう}す^すま^まに^にあ^あら^らじ^じの^の先生^{せんせい}は^は善^{ぜん}業^{ごう}の^の報^{ちかひ}が^が盡^{つく}す^すま^ま
 へ^へ又^{また}此^{この}世^よの^の悪^{あく}業^{ごう}の^の果^はが^が報^{ちかひ}を^をあ^あら^らじ^じに^に故^ゆ
 に^に善^{ぜん}報^{ちかひ}も^も續^{つづ}善^{ぜん}を^を盡^{つく}す^す時^{とき}あ^あら^らじ^じ悪^{あく}
 報^{ちかひ}も^も續^{つづ}悪^{あく}を^を盡^{つく}す^す時^{とき}あ^あら^らじ^じ
 續^{つづ}善^{ぜん}と^とハ^ハ善^{ぜん}業^{ごう}を^を造^{つく}す^すは^はけ^けあ^あら^らじ^じ續^{つづ}
 悪^{あく}と^とハ^ハ悪^{あく}業^{ごう}を^を造^{つく}す^すは^はけ^けあ^あら^らじ^じ
 善^{ぜん}業^{ごう}ハ^ハ間^{あひ}乃^{すなは}ち^ちき^きれ^れぬ^ぬ様^{さま}に^にあ^あら^らじ^じ悪^{あく}
 業^{ごう}ハ^ハ間^{あひ}乃^{すなは}ち^ちき^きれ^れぬ^ぬ様^{さま}に^にあ^あら^らじ^じ

業ハはげぬ様にきこふよし。譬ハ五穀を
 此年ころもて歳々其實ははげ方代も
 も盡るもりふもハあひそれも又一年植て
 翌年の植ぬ時ハ用ひるに随て終りて
 盡て志留ふ様おもふなり。総て業因
 の深いと浅いものによる受る果報に三時
 乃差別ハあれども。おそろしきやまの一度

あゝ業乃因果善悪の其報を受
 めるふあやひなるれども。麥を時
 て米をこころもちらび。教を志し
 粟もせられぬ様おもふぞ。善果報を
 得ると思ふ。必し種はまらぬを
 也。善悪の因果の道理もよくかく
 此如く。あられが少の悪をも恐て造ぬ

のよー又よーがら善ぞの頼しく思ひ悦で
 人にも勧る様ふ心づけるのよー宛乎春粗
 一粒まけば秋ふ川さふと一穂ふ數万粒の
 米が出来る如く因業は種をまきつづても
 其むくひの果報は於に善悪ともに廣大に
 受る。又世間に心得ごとあひの有ハ親の善
 業をなすべし子孫も繁昌さるんまも

のと思ふ居る矢先に却て子孫の代に
 衰微さるもあや。親の悪事をぬくを
 らば子孫は不幸にあやさる者か。却て
 子孫の代は繁昌さる。是を見て得
 てハ因果とてふとやあいにやあぞ。撥無
 さる。罪人が多い佛法とて自業自得果
 たりして。子が親よのいづれも。親が子よ代

あやふあらぬ習ちめバ子でも親づも眷
属づも其銘くも作も置も持前限も報
を受る。されば別業別果とて世も又
父一人の功によつて子孫までも富貴を
持ち或ハ父一人の罪によつて子孫までも
貧賤やおよぶとある。是を同業所感の報
せりふ。先生は造置し業が同きゆらに

受る所の報も亦同ト。悉皆自業自得果
でなむものハなひ。諸又業に定業と不定業
とのある。定業を決して轉じることある
び不定業の事によつてハ轉じることある
ある。譬バやまの風の吹きて消るも。
油がなく燃え尽きゆれば様ある。此。
風によつて消るも不定業や燈籠

あまぐ防もなまぐ油の盡て消ると定業
はくふのまゆまぎ様があひ儲其業と
轉ぶることハ譬バ敵討如く此方が先の
敵より強の時と必敵をほろぼり又此方が
先の敵より弱の時と却て敵よりほろぼる
善業の悪業よりから悪業乃善業より勝を
も亦復のく此如し。假令定業といふもの

今の業力があれば勝とも又轉ぶる例も
あま昔憍薩羅國は勝軍王とのふに太醜
姫があつて其姫が一心佛を念う奉り。
餘念なく慚愧懺悔せられたるは其善業
力の強よりあつて急ふ容顔美觀なる婦人に
變つたと大毘婆沙論に示してある是
も善業力が強ければ此世に於て直に善

果を得て。例又荊州の季生とりふ者の妻
 焼餅の中へ見輩の糞を入て姑にぬくまふ
 ち終を活ながら狗になつてよを勸徴政
 事ふ記してある。あれを悪業力が強よふて。
 定業を轉トて。例ある。先一通なれを醜
 容も生かたう糸を羨しひとめ。うぢふ
 みるあられども又人間の境界が直ふ狗よふ

ものであつても。右の如く此生に於て
 直ふ變トて。誠ふ今の業力が純一
 して尤強うらむる。であら。あれたらの因
 縁佛經祖論ハ勿論乃とも。俗書にも數多
 ある。あやふれをよみて考知がよ。然を
 善業によらび悪業よらむ。をて今
 日の勤行業力は強時へ轉ト難き定

業をも頓小轉せらるゝあやもあつ。爰もツ
入心得てをさらば後をあらぬあもあ。銘
くぐ過去でる。けり。拵置て。生もよ。死
め。ま。で。定。く。福。分。が。あ。る。あ。も。の。求。て。到
来。ま。も。で。も。あ。く。求。め。て。到。来。せ。ぬ。で。も
ま。の。是。を。生。得。命。分。と。い。ふ。た。も。入。百。年
の。壽。命。あ。る。人。も。少。ゆ。く。米。千。石。の。生

得命分があも。一年に十石づく用て。百
年まで不足あり。に同ド。ら。ら。と。い。ふ
ま。の。又。ま。の。を。一。年。に。廿。石。宛。用。て。使。過。せ
る。五。十。年。の。間。に。盡。て。ま。も。の。ま。の。の。末
五。十。年。の。間。に。命。は。は。ら。ぬ。ま。の。ま。の。
あ。ら。る。壽。命。が。ま。の。の。又。ハ。渴。命。に。あ。ら。る。
或。も。人。の。物。を。使。て。あ。ら。る。ま。の。の。ま。の。の。ま。の。

外の如くハ、若又身代慎く福を
 一年に五石宛に用てあら、皆
 年が間用てもまづ五百石は餘分がある。
 若しこれバ壽命を延て用る。又も来
 世へ持送の何も空くも、やむいふも
 ない。若時貧乏しくも、老年におよんで
 富貴なるもの、生得乃福を末に送つていふ

もの。或ハ若時外ゆつて、老年に
 貧窮なる。命分を先取越つていふ者
 かの入るも、れやぞ、生得命分を
 せぬものあれば、衣食住乃三ツの上ハ勿論
 其外何ふより、平生心をけりて華麗
 好まじ。自分身代約て人を賑へ。施す
 行つ福分を積やうに、肝要なり。

孟子は儉して施を好むを戒めてお
の道理よく随分あるはけ自身を儉約
まはる相應ふ人にも施さざるものなり。只
万事おぼろしく身は高ぶらば人おろ下
に敬ゆるは道はさうして一切の上に欲を
くまの終足ことを志すことある少欲知
足乃いさしめ成根本とさくまれを福分

壽命はおのづから増長して畢竟
くも無上は佛果をも圓成することあり。
志す佛果は圓成せしむる。因果乃
本を明らめ終はならぬ。最の始は因ハ誰
かいつのよに時をみせ次第に其果を
受むるは最初は因をくみて叶しぬ。あま
らぬ時をたもひ極樂へ往るのやを極

三時業落草 終

因果經和讚

歸命頂禮釋迦如來

善惡善樂法其故也

現在世間乃常態也

器量愛敬備をもつハ

形見みくた其人を

位貴き身ともなり

多聞第一阿難尊

問つ答川因果經

皆是過去の報あり

忍辱柔和の報あり

いづる腹立報あり

人皆敬ふ其功德

落魄賤き輩を
壽命福德を以て
飢つ寒川貪き
兒女や孫乃榮るも
命も短く子も無
智慧發明は膝を
道理も暗き愚人

人を侮り傲る過
愆を施す善根を
惜み貪る驗あり
物に命を救ゆも
殺生し報あり
學文誦經の利益也
畜生道より來り

をば盲人不仁もの
馬牛下部とある者ハ
悪病業病煩き
恩を讎するのハ
五逆十惡造るハ
遅い速いをあるも
直に現世ふむるも

破戒無慚の罪とや
借てかかぬその報
三寶破り大罪よ
假し親に不孝也
無間地獄に沈む
報ハさきに遁せし
來世ふめぐさるも有

此世このよの善惡ぜんあくを
 まづて未來こゝろの種たねをまじ
 むるは、
 免角めんかくの慈悲じせいを為なす
 憎にくみ可愛あいの折まじり
 因果いんぐわの本もとは心こゝろの
 尋たづねありし其時そのときハ
 まづに其儘そのまゝ佛ほとけあり

法孫泰忍

因果經和讃終

定價金四錢

三重縣

伊勢國度會郡山田志久保町

平民 大石高太郎

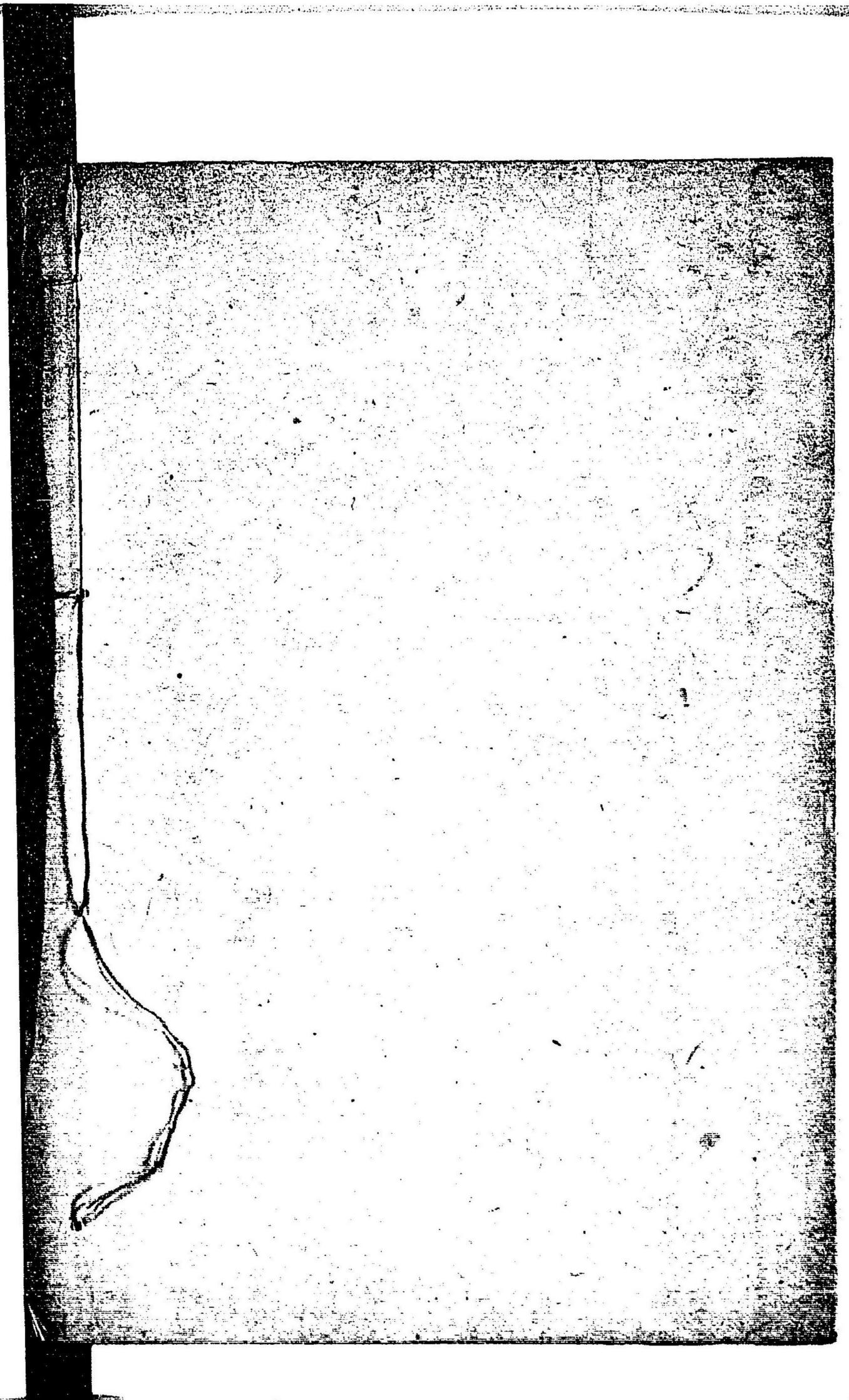
明治廿二年二月十日出版 加藤長平

全縣

紀伊國南牟婁郡有馬村

故人雲擡著相續者六百四番地

山獄尾泰忍



特43

516

019459-000-6

特43-516

三時業落草

雲檀/著

M22.2

ABG-0177

